
魔法（ゆめ）香る街角の詩（うた）

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法^{ゆめ}香る街角の詩^{うた}

【Nコード】

N9397Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

隣の家に引っ越してきたのは、魔法使いの女の子だった。

1話分が短い、変な話の魔法もの(?)です。

第1話 隣人は魔法使い

「あつ、お隣、誰か引つ越してくるんだね」

幼馴染みの遥架^{はるか}が言った。

この名前だと、どっちか判別できないかもしれないから言及しておくと、遥架は男の子だ。

私、美羽^{みは}とは昔から大の仲よし。

家が隣同士の幼馴染みだから、当然といえば当然なのかもしれないけど。

今ではさらに、同じ高校に通う同級生でもある。

そんな私の家の隣——遥架の家とは反対側の隣の家に、なにやらトラックが停まって、次々と荷物が運び込まれているのが見て取れた。

この家は、随分と長いこと、空き家になっていたのだけど。ようやく住む人も決まったということか。

「そうだね。どんな人が住むのかなあ」

私が期待と不安が入り混じった声をこぼすと、すかさず遥架が言葉を重ねてくる。

「ヤのつく職業の方だったりして」

「ちよっと！ 怖いこと言わないでよ！」

まったく、遥架は……。

もっとも、遥架の意地悪発言はいつものことなのだけど。

「あつ、来たみたいだぞ」

遥架の声に従って視線を向けると、ひとりの女の子がこちらへと歩いてきていた。

そして隣の家——引越しの荷物が運び込まれている家の前で立ち止まる。

私たちの視線に気づくと、彼女は可憐な花が咲き乱れるかのような笑顔を振りまきながら話しかけてきた。

「こんにちは、隣の家の方ですかあ？ 私、結音^{ゆいね}っていいいますう。よろしくう」

なんだか、のんびりした感じの子だなあ。
それが私の第一印象だった。

「ヤクザじゃなくて、よかったな」

遥架が耳打ちしてくる。

ま、でも、それは確かによかった。

「だけど、親がヤクザとかって可能性も、ありえるかもしれないけどな……」

遥架はさらに耳打ちを追加してくる。
まったく、こいつは……。

それはともかく。

私は目の前の女の子をじっくりと観察してみた。

ぱつと見は幼いイメージだけど、おそらく私たちよりいくつか下——中学生になるかどうかといったところだろうか。

ポニーテールにまとめた髪がさらさらと揺れているのが、とっても可愛らしさを助長している。

しかも、にこにこと温かい笑顔を向けてくる様子を見るに、地上に舞い降りた天使かとも思えるほど。

……というのは、さすがに言いすぎだろうけど。

ただ少し気になるのは、ご家族の姿が見当たらないこと。

先にこの結音ちゃんって子だけ来て、他の人はあとから来るのだろうか？

私が質問してみると、思いがけない言葉が返ってきた。

「あたし、ここにひとりで住むの〜！」

結音ちゃんはおくまでにこやかに、さらつと答えてくれた。

まだ中学に入るか入らないかくらいの歳みたいなのに、ひとり暮らしだなんて。

「大変ねえ……」

私は思わずつぶやいていた。

「うん〜。頑張つて魔法を使わないとお〜」

『えっ!?!』

私と遥架の声が重なる。

今……なんとおっしゃいましたか？

「あ……秘密だったんだ〜、言っちゃったあ、てへ♪ あたし、魔

法使いなの。でもこれって、秘密だからあゝ、誰にも言わないでねゝ！ 約束よゝゝ！」（にこお）

結音ちゃんは、やっぱり花のような笑顔を振りまきながら、そんなことをたまった。

私と遥架は、黙って頷くことしかできなかった。

……隣人は、もしかしたらヤクザよりも厄介な人なのかも……。

とはいえ、楽しくはなりそうだ。

ちよつと現実逃避気味にはあったけど、私は前向きに考えることに決めた。

第2話 K

にゃーにゃー。

騒がしい鳴き声で目が覚めた。

学校へ行く準備をして外に出てみると、なぜか猫の大群がびっしりと結音ちゃん家の前の道路を覆い尽くしていた。
な……なんだこれ……？

「あつ、おはよう」

そんな猫たちに囲まれていたのは、もちろん結音ちゃんだった。
まあ、他にありえないとは思ったけど。

それにしてもこの子、またたびの匂いでもふり撒いてるの？

……つて、やばい！ 遅刻する！

猫で覆い尽くされている現状つても気にはなったけど……。
結音ちゃんは魔法使いらしいから、魔法でどうにかするでしょ。

「おはよう、結音ちゃん！ でも私、急ぐから！ またね！」

軽く挨拶を残して、私は遥架の家のチャイムを押す。

私が迎えに行かないと出てこないのだ、遥架は。

それで遅刻したことが何度あったことが……。

「おはよう、美羽。……あれ？ 結音ちゃん家の前、猫が——」

「今はそれどころじゃないわ！ 学校まで走るわよ！」

「お……おう……」

慌ただしく走って登校するのも、ごくありふれた光景だ。

そして放課後。

いつものように、私は遥架と一緒に下校してきた。

「そういえば、今朝のつて……」

「猫だったわよね。何十匹もいたような気がする……」

にゃあ。

家の前まで着くと、やっぱり猫はいた。

でも、朝とは違って1匹だけだった。

「黒猫だね」

「そうね」

しかもその猫は、結音ちゃんの足にべったりとすり寄っている。

「あつ、おかえりいっ」

猫にすりすりされたまま、結音ちゃんが満面の笑みで私たちを出迎えてくれた。

「なつかれてるわね」

「うん。どうしよあ、困ったなあ」

全然困っているようには思えない口調だったけど。

「まあそれだけなつかれてたら、飼うしかないだろ。魔法使いといえば、やっぱり使い魔の黒猫ってのが基本だし」

遥架がきつぱりと言つてのける。
いや、まあ、そうかもしれないけど……。

「うん、そうだね」

どうやら結音ちゃんも納得したようだ。
って、あっさり納得しちゃうんだ……。

そりゃあ、なついている猫を放り出すっていうのも可哀相だし、
飼うことには賛成だけど。

……結音ちゃん、ひとり暮らしなのに、大丈夫なのかな……。
私が餌代とか世話とかに関して心配しているというのに、結音ちゃん
と遥架はまったく気にする様子もなく、使い魔として飼う方向
で話は進んでいるようだった。

「それじゃあ、名前をつけてあげないとな」

「名前……うん、決めた！ 『ねこ』」

「そのままじゃん！」

さすがにこれは、あまりにもひどい……。

「もうちょつとちゃんと考えようね！」

「じゃあ、く——」

「黒いからクロなんてのも却下ね」

「う……」

凶星だったらしい。
考え込む結音ちゃん。

「決めた！ Kで！」

「アルファベット！？」

とは思ったものの、まあ、まだマシかな、と結論づける。というわけで、命名『K』と相成りました。

実際のところ、KUROの頭文字でKだったみたいなのだけど。

「それじゃあ、行こう、Kちゃん！」

「あいにゃ！」

結音ちゃんの言葉にはつきりと答え、Kはしっかりと2本足で立ち上がったK……。

そのまま結音ちゃんに続いて、家の中に入っていつてしまった。

呆然と立ち尽くす私。

うん、まあ、見なかったことにしよう……。

隣に立っている遥架も、「今日の晩ご飯はなにかなあ」と、現実から目をそむけているようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9397y/>

魔法（ゆめ）香る街角の詩（うた）

2011年11月28日01時55分発行